

# バイオパシー協会 会報

Vol.57

2018年2月



## Contents

バイオ・ノーマライザーの働き 静菌作用 .....	2
---------------------------	---



バイオ・ノーマライザーにはいくつかの働きがあります。活性酸素を消去したり、免疫を活性化するなど皆さんも良くご存じだと思いますが、今回は他の健康食品やサプリメントではほとんど見られない、「静菌作用」という、ちょっと不思議なバイオ・ノーマライザーの働きについてお話しします。

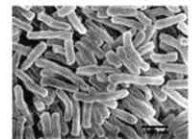
### ★ 菌（きん）とは何か

Wikipediaでは次のように解説されています。

菌とは、元来、キノコを意味した。漢字「菌」の訓は「きのこ」である。

近代には、菌類、つまり、キノコに似ていると考えられた生物の雑多なグループを指すようになった。その中で代表的なのは、キノコ・カビ・酵母などを含む真菌である。

さらに、後になって発見された微小な生物であるBacteria（バクテリア）にも細菌（真正細菌）という単語が当てられた。一般に耳にする〇〇菌（結核菌や乳酸菌など）のほとんどは真正細菌に属する。



この解説で分かるように、菌には酵母や乳酸菌などのように私たちにとって有用なもの、結核菌のように病気の原因物質となるものがあります。

結核は、大里章博士がバイオ・ノーマライザーを開発するきっかけとなった病気です。大里博士はこの時のことを著書「病気は自分で治しなさい。」の中で触れています。（以下概略：原文のまま）

私は、奈良の畝傍中学の三年生のとき、学徒動員を受け、名古屋の三菱発動機製作所で奉仕することになりました。同じ中学校の生徒約三百名全員が入寮し、全員が毎日まったく同じ生活を送ることになりました。

朝は同じ時刻に一斉起床、広場で朝礼・点呼・体操をした後食堂に移動して、同量・同質の朝食を摂り、同じ交通機関で工場へ。昼も同時刻に同量・同質の食事を摂り、夕方になると再び一斉に同じ経路で帰寮し、同じ時刻にまた同量・同質の夕食。その後、同じ風呂に入り、雑談の後一斉消灯、就寝という繰り返しでした。

食事は量も質も貧しくいつも全員が腹ぺこでした。私は栄養失調にかかり、それがもとで肺結核におかされ、養老（岐阜）にある工場付属の隔離療養施設に移って闘病生活を送るハメになりました。

そのとき中学三年生の私は、次のようなことを考え始めたのです。

全員がまったく同じ物を食べ、同じ生活をしているのだから、誰かが病気になれば、当然、皆も同じタイミングで同じ病気にかかっていいはずだ。ところが、実際には、人それぞれ異なる病気にかかるのは、いったいなせだろう？ かりに同じ病気にかかったとしても、人によってそのあらわれ方は違う。

そんなことを考えているうちに、病気になるかならないか、また軽症か重症かは、病気そのものによるのではなく、人によるのだということに気づいたのです。

さらに、私の考えは進んでいきます。人間は通常、生まれたときは何の病気にもかかっていない。ならば、生まれたときの状態にするのが最も自然であり、病気も退散するのではないか。身体さえ丈夫なら病気にはかからない。身体を活性化させることができればどんな病気も追い出すことができる……。

一時的に弱った肉体も、何らかの方法で再活性させることができれば、後から侵入してきた病気など追い出せるのではないか。とすれば、後天的な病気ならば、どんなものであっても克服できるはずだ。治療法がないとされているガンや成人病や多くの慢性病も克服することができるのではないか。

つまり、病気を病名ごとに追うのではなく、強靱な肉体の再構築さえできれば、どんな病気も治せるのではないか。



### ★ 参考：結核に関する最近の情報

結核は大里博士が発病した当時、日本人死亡原因の第1位でした。戦後抗生物質が日本にもたらされたことで死亡者が激減し、2016年では死亡原因の10位より下となっています。しかし2015年日本の結核罹患率は人口10万あたり14（約7,000人に1人）で、他の先進諸国の数倍の高さ、米国の1970年ごろの水準にあることから、日本は「結核中進国」と位置づけられています。

2017年沖縄県内において最初に登録された結核患者と接触した可能性がある方の検診を行ったところ、発病者が4人おり、うち1人が死亡、結核菌に感染しているが発病していない感染者5人が確認され、集団感染事例と判断されました。

結核は昔の病気ではありません。

咳や痰が2週間以上続いたら、医療機関で診察してもらいましょう。

### ★ 感染症と化学療法

感染症とは、結核のように私たちの身体に病原（性）微生物が侵入してきて、それが増殖し、そのため色々な症状が現われてくる病気です。感染症の治療の根本は、その病気の原因である病原性微生物をやっつけることで、そういう働きがある薬が抗生物質や抗菌剤です。

抗生物質や抗菌薬は、抗生物質という細菌を退治する化学物質から作られています。

1929年にペニシリンが発見され、その後1940、1950年代に、細菌やカビから発見された数多くの抗生物質から抗生物質が実用化され、今日に至っています。

抗生物質によって多くの生命が救われてきましたが、その使用が増えるにつれて、ある問題が浮上しました。耐性菌の出現です。1961年にペニシリン系の「メチシリン」が効かないMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）が英国で最初に報告されました。それからというもの、人間と細菌とのいたちごっこが始まり、耐性菌が出現しない抗生物質と言われていたバンコマイシンにも、1986年には耐性を持つVRE（バンコマイシン耐性腸球菌）が報告されました。

耐性菌は日々進化しており、数種類の抗生物質に耐性を持つ菌もできています。多剤耐性を持つ結核菌の場合は治療が困難となっています。



### ★ なぜ耐性菌ができるのか

地球上の生物は、植物、動物、微生物の3つに大別されます。生物は細胞と呼ばれる極めて小さな単位で構成されています。細菌は単細胞の微生物です。そして、全ての細胞は生存と生殖という共通の目的をもって活動しています。

さて、抗生物質は大きく分けて、殺菌剤と静菌剤に区別できます。

殺菌剤は菌を直接死滅させる物質で、細菌にとってみれば生存と種の継続を脅かす大変な敵です。殺されないで子孫を残すために、細菌はあらゆる手段で殺菌剤の攻撃をかわそうとします。そのしくみは①細菌がある物質を作り、抗生物質を分解したり、抗生物質の形を変えてしまう。②細菌自身の構造や構成部分を変化させて抗生物質が働かないようにするなど、とても複雑で、またとても巧妙なものです。殺し続ければこのような結果が出るのは当然とも言えます。また、殺菌剤は悪玉菌だけでなく善玉菌も殺してしまうのも難点です。

静菌剤は投与している間のみ菌の増殖を抑制する物質です。

### ★ バイオ・ノーマライザーの抗菌能に関する研究

患者の消化管から採取した標本を実験室で培養した研究で、バイオ・ノーマライザーは日和見性細菌と病原性細菌に対し、殺菌剤のように殺してしまわず、その増殖のみを抑制する性質、つまり静菌作用を持つことが確認されています。

腸内の善玉菌・悪玉菌のバランスは、消化吸収ばかりでなく、ホルモンやビタミンの産生、免疫系の賦活、免疫疾患、発がん物質の産生、睡眠や自律神経などにかかわっていることが明らかになり、善玉菌を増やす方法として、ヨーグルトなど発酵乳製品で善玉菌そのものを摂取するとか、善玉菌のえさとなる食物繊維を摂取するなどが勧められ、様々な商品が宣伝されています。

バイオ・ノーマライザーは悪玉菌だけの増殖を抑える結果、善玉菌が増えていくのです。

バイオ・ノーマライザーを食べると、大便やおならの臭いに変化していきます。悪玉菌は腐敗菌ですから大便やおならは大変臭いのですが、発酵菌である善玉菌が増えると臭いはあまりしなくなります。バイオ・ノーマライザーの働きが体内できちんと現われている証拠です。

また、ある国立大学で行った土壌菌の研究があります。

実験では、植物に最も悪い影響をもたらすカビ（リゾクトニア）を、無菌処理をした土を入れた試験管の中に植え付け、バイオ・ノーマライザーを与えると、そのカビはどんどん増殖します。また、2番目に悪い影響を与えるカビ（フサリウム）の場合も、同じようにどんどん増殖していきます。

これらの結果からすると、悪者を増殖させているわけですから、バイオ・ノーマライザーが良いものであるとはとても言えません。

次に、野菜が植えてある自然の土壌に、この2つのカビをそれぞれ植え付け、バイオ・ノーマライザーを与えてみました。先の試験管テストの結果から、誰もが、野菜はすぐに枯れるだろうと予想していました。ところが、この場合は、通常より成長が早まったのです。

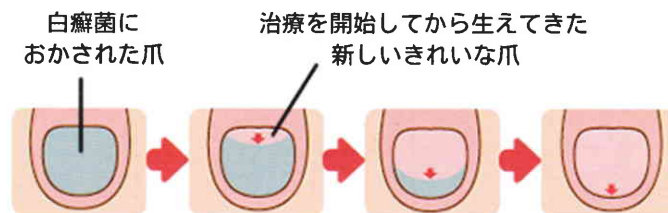
そして、バイオ・ノーマライザーの静菌作用はグラム陽性菌、グラム陰性菌の両方に対し、それらを安全に抑制・調整するという、従来の薬学・医学の常識をくつがえす物質である事も分かりました。

この結果から考えられるのは、周囲の影響を受けない閉鎖的な環境にあっては、バイオ・ノーマライザーはそこに存在する微生物や生物を、善玉・悪玉の区別なく増強させる性質がある。しかし、種々の物質、成分、カビや微生物などがいっぱい存在するオープンな環境にあっては、悪いものを弱体化し、増殖を抑えるのです。この不思議な働きは、良い菌も悪い菌も混在しながら平衡を保っている自然な状態に返す機能とも言えます。

### ★ 白癬菌による「爪水虫」について

爪水虫の原因は白癬菌というカビの一種（真菌）です。治療には飲み薬か塗り薬が処方されず。飲み薬の場合、薬の成分が血流にのって爪まで運ばれ、爪の中から白癬菌を死滅させます。

足の爪は1日0.05mm、1ヶ月に約1.5mm伸びると言われています。飲み薬を3～6ヶ月程度服用し続けると、新しい爪に生え替わりながら、ゆっくりと治っていきます。



バイオ・ノーマライザーで完治した体験報告が多くの方から寄せられています。

- ✓ 1000倍溶液に爪全体を浸します。
- ✓ 浸す時間は短くても構いませんが、一日に何度でも浸してください。
- ✓ 1000倍溶液は10日間程度使えます。発酵臭がきつくなったら取り替えましょう。
- ✓ 上の図と同じようにゆっくりと治ります。  
(静菌作用で白癬菌の増殖力が衰え、爪の奥に食い込まなくなります。)

この他、真菌が原因のカンジダ症の体験例もあります。  
詳しくはバイオパシー協会にお問い合わせください。

発行：特定非営利活動法人 **バイオパシー協会**

〒337-0043 埼玉県さいたま市見沼区中川929-2

TEL：050-3339-6628

FAX：050-3339-9591

E-Mail：info@biopathy.jp

http://www.biopathy.jp

平成30(2018)年2月 発行

発行責任者 小林 隆 非売品：会員学習用

この会報は、会員の皆様にバイオパシー協会の活動目的である、医療情報の提供を目的として制作しています。

商品の購入は自己責任でご決定くださるよう、お願いいたします。

この会報の著作権は、バイオパシー協会に帰属しています。いかなる目的であれ、無断で使用することを固く禁じます。